

能《鞍馬天狗》における孤独

大阪大学大学院文学研究科准教授 中尾 薫

一、義経と天狗説話

牛若丸のちの九郎判官義経の物語は、文学・芸能に「判官物」「義経物」とよばれる作品群を産み出した。しかし、牛若丸が、鞍馬寺にて修行をし、天狗に兵法を習ったという伝説は、すでに諸氏が指摘する通り、それほど多くにみられるわけではない。

『平治物語』（流布本、巻三）では、「昼は終日学文を事とし、夜は終夜武芸を稽古せられたり。僧正が合にて天狗と夜な夜な兵法を習うと云々」と簡潔に記されているのみである。

『平家物語』で、義経の幼少期について具体的に記しているのは、巻十一「嗣信最後」ある。八島にて、平家方の越中次郎兵衛盛次が、船中から身を乗り出し、源氏方に「今日の源氏の大將軍は誰だ」と大音声で問いかけたところ、伊勢三郎義盛が、「九郎大夫判官殿である」と答える。それに対し、盛次が、

さる事あり。一とせ平治の合戦に父討たれて、みなしこにてありしが、鞍馬の児ちこして、後はこがね商人あきんどの所しよしやう従になり、糧料せおうて奥州へ落ちまどひし小冠者が事か。

と言ひ放ち、言葉争いになる場面である。みなしこ、鞍馬の稚児、商人の所従、食料・糧料を背負って落ちまどつていた、小冠者、という語は、いずれも愚弄の意味を含む。

稚児が、男色の対象となっていた例は、たとえば『宇治拾遺物語』の比叡山の稚児や、『秋夜長物語』（南北朝）の、比叡山の僧桂海が三井寺

の稚児梅若と恋に落ちた例などがある。多くの場合、愛妾となる稚児は寺社の墮落ぶりを象徴する存在として描かれてきた。盛次の悪口は、鞍馬寺で稚児だったということは、そういう存在だったのではという、偏見に満ちた言葉だったのである。ここでも天狗の話は触れられていない。

いっぽう、南北朝の応安年間（一三六八～七五）に成立かとされている『太平記』の巻二八「阿保秋山四条川原合戦の事」では、秋山新藏人光政の名乗りのうちに「鞍馬の奥僧止谷にて、愛宕・高雄の天狗どもが、義経に授けし兵法をば、残らずこれを伝へたり」とあり、この頃には、天狗に兵法を習ったという伝説が、すでに巷間に知られていたことがうかがえる。

そうすると、能《鞍馬天狗》は、少なくとも南北朝期以後に成立したと考えられるが、上演記録としては、寛正五年（一四六四）三月九日將軍院参の観世能（『親元日記』）までしか遡れない。作者は、世阿弥説（『金春系』『自家伝抄』）と宮増説（『観世家』『能本作者註文』）があるが、現在は、宮増説をとる場合が多い。しかし、複数の宮増姓の役者の存在が知られており、それらの詳しい系譜は十分に解明されておらず、能《鞍馬天狗》の作者として比定するには、慎重にならざるを得ない。

二、能《鞍馬天狗》の花やぎ

満開の桜のもとで繰り広げられる能《鞍馬天狗》は、最初は、明るく

陽の気にあふれている。鞍馬山の奥にある僧正が谷にすむ山伏（シテ）が、鞍馬山で花見があるとの噂を聞き、「よそながら」梢でも見ようと出かけるところから始まる。

場面は変わって、鞍馬の西谷の寺の能力（アイ）が登場する。西谷と東谷は、花見会のお世話係を毎年交替で受け持っている。今年は西谷の当番だが、東谷が花見に来てくれる様子がないと、やきもきして手紙をやることにする。

また場面が変わる。東谷の僧（ワキ）が、西谷からの手紙を受け取ると、そこには「けふ見すは悔しからまし花盛り咲も残らず散りも始めず」という古歌が書かれている。「今日桜を見に来なければ後悔するかもしれないですよ。今まさに花盛りです。残らず咲き、一つも散り始めていません」とでもいう意味である。山桜が咲き誇り、折り重なる風景が脳裡に広がるだろう。便りがなくても花見に行くつもりだったと東谷の僧は、花見に向かう。ともに連れて行くのは、花に負けじと華やかな装束に身に包んだ稚児たちである。世阿弥は『風姿花伝』第一「年来稽古条々」に、十二、三歳ころよりの役者は「今でいうと小学生から中学生ぐらい、ちょうど花見の子方役ぐらいの年齢である」、「先童形なれば、なにとしたるも幽玄なり。声も立つ頃也」『悪き事は隠れ、よき事はいよいよ花めけり』と言う。姿も良し、声も良し、悪い癖など気にならなく、舞台にいただけで花めくのが、この頃の子方なのだ。それが一人ではなく群をなしている。楽しみにしていた遠足にいく児童たちの、圧倒的なエネルギーと賑やかさに、誰しも接したことがあるだろう。しかも、能『鞍馬天狗』に登場する彼らは、今を時めく平清盛の子たちなのである。将来の栄光をも約束された恵まれた子たち。これ以上のはなやぎはないだろう。花見に興じる稚児たちを楽しませるための、能力のかわいらしい小謡が、賑やかさをさらに演出する。

そんな花やぎの頂点にあつて、冒頭の山伏がそこにやってくる。舞台の空気が一変するという構成がとられる。「よそもの」であることを自覚していた山伏であるが、花見の会へ突如乱入した狼藉者として扱われる。東谷の僧は、「外人」がここにはいけないと、人を選ぶのはよくないと、一見、平等主義的なことを言いつつ、しかし共に花見をしようとはならず、「花をば明日こそ御覧候べけれ」と、稚児たちを引き連れ帰ることを選択する。西谷からの手紙にあった、今日がまさに見どころであるという古歌の心からすると、明日の花見では時期を逸してしまふことになる。それだけ近寄りたがい佇まいの山伏だったと読むべきだろうか。

三月にも花にも捨てられて候

山伏を残して花見の一群は去っていくが、一人の少年が残る。彼こそが幼き義経こと牛若丸、鞍馬寺での名は遮那王である。ここからは舞台上の動きは少ないが、謡は詩歌の引用を駆使した凝った作りになっている。

まず、山伏が謡う「遙かに人家を見て花あれば便ち入る、論せず貴賤と親疎とを弁えぬをこそ」は『和漢朗詠集』の白楽天の歌に拠る。「遠くから人の家に花が咲いているのを見つけたら、すぐに見に行く。その家が金持ちか貧乏か、親しい家か親しくない家かは関係がない」という意味である。花を見つけたら近づいて花見をしたいという気持ちは誰もが同じで、私も花見がしたかっただけなのに、なぜ仲間外れにするのかという不満をつぶやいたのである。それに対し、遮那王は、「げにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友」と言葉をかける。これは『平家物語』三「少将帰洛」に見られる句である。たった半日花の下で一一緒にいた客、月の前でたった一夜だ

け一緒に過ごした友でさえ親しみをを感じるものです。お気の毒に、こちらに来て花を御覧なさいと、思いがけなくも優しい少年の言葉に、山伏は自らのことを「松虫の音だに立てぬ深山桜」と表現する。松虫の音は『古今集』などから友を連想させる語といえる。松虫の音さへしない深い山奥に咲く桜のような私、訪ねてくれる友もない山奥に住んでいる独りぼっちの私に声をかけてくれてありがとうと、山伏は感謝の意を伝える。

さて、続く「この山に」以下の、山伏と遮那王の謡の掛け合いは、以下のように解釈したい。「私はこの山に住む」と自己紹介するつもりだった山伏の言葉を、遮那王はひきとって「ありとも誰か白雲の、立ちはたねば知る人もなし」と続ける。「あなたがこの山に住んでいるとは知りませんでした。私は人と交際しないので知っている人もいないもので」という意味である。強調しておきたいのは、遮那王も、山伏と同様に友もない孤独の身であること告白したということである。それに対して山伏は「誰もかも知る人にせん高砂の…」という『古今集』の藤原興風の歌を引用する。年をとって旧知の友がみな亡くなってしまい、長寿の象徴とされる高砂の松すら昔の友とは思えないという孤独感をうたった歌である。

山伏の謡う和歌の句「高砂の松」に続けて、「遮那王へ松も昔の。山伏へ友がらすの。地へ御物笑ひの種時くや」と互いに言葉を交わす。「松」鳥「笑う」と連歌の寄合で構成されている。ここは二人の心の通わせ合いを表現していると考えたい。

続く謡は、山伏の遮那王に対する淡い恋の気持ちとも受け止められこともあるが、これは稚児愛妾の例を踏まえた文芸的な遊びともいえるべきところで、真に恋心を抱いたとまで深読みする必要はないだろう。続く問答に、遮那王が「月にも花にも見捨てられて候」と吐露する言葉に象徴されるように、時代に見放された孤独な少年に、山伏は自らの

身を重ね合わせ、深く共鳴するのである。

四、兵法伝授のきっかけ

その孤独な少年が、源氏の忘れ形見だと知り、山伏は「よその散りなん後にこそ、咲かは咲くべきに」と言つて、奥山に見に来る人もなくさびしく咲く桜の名所、京都の愛宕・高尾、滋賀の比良・横川、奈良の吉野・初瀬を見せてまわる。まるで、今咲き誇っている平家という花が散ったあととは、この奥山の桜のように今は顧みられないあなたの花が咲くと、勇気づけるようである。山伏はついに大天狗であるという正体を明かし、兵法の大事を教えるので、平家をほろぼしなさいと力づける。

この点は、能『鞍馬天狗』と同じく義経と天狗の交渉を詳しく描いている幸若舞曲『未来記』との違いとして留意される。『未来記』では、牛若丸が鞍馬の奥僧正が谷の山岳を走り回り、古木の枝々を伝ひながら兵法稽古をしているところ、天狗たちが「我らがすみかを嘲る」ので、罰を与えようと相談を始める。しかし、実は父母の孝養のための兵法稽古らしいから、むしろ情けをかけるべきだと議論が転じ、天狗の法を教える。つまり、天狗に会う前から、父のために平家を討とうと自主的に山で修業をしていたのが、幸若舞『未来記』であり、その孝行心が天狗の心を聞き、兵法の伝授へとつながった。

しかし、能『鞍馬天狗』では、そもそも父の仇討という点はあまり意識されていないようで、平家を滅ぼすという人生の目標を与えたのが天狗で、平家を滅ぼそうと決意するならば、兵法を伝授しようと言うのである。このような大志を抱かせたのは、先述のように、孤独を共有し、心を通わせたからにはかならない。